

[平成18年度普及に移した技術]

[普及に移す技術名] ウメ樹園地土壌のpHとリン酸の現状

[要約] ウメ園の土壌診断結果から、低pH園地は30%、高pH園地は39%ある。可給態リン酸は67%の園地で50mg/100gを超える過剰である。これは数年分の施肥に相当するリン酸量が蓄積している。

[キーワード] ウメ、土壌診断、施肥改善

[担当] 福井園試・ウメ研究グループ

[連絡先] 電話 0770-32-0009、電子メール enshi@pref.fukui.lg.jp

[分類] 参考

[背景・ねらい]

福井県のウメ園は傾斜地に多く、施肥をはじめ土壌管理に手間をかけられないので、施肥は表層散布が中心に行われている。昭和59年に嶺南地域100ヶ所の土壌診断が実施されているが、その後の施肥体系の変化により土壌環境の変化が考えられる。

そこで、県内のウメ主要栽培地215ヶ所の土壌（主幹から約2m、表層から深さ15cm）を採取・土壌診断し、これら諸問題を解決するための資料に供する。

[技術の内容・特徴]

1. pHが5.5以下の園地は昭和59年に72%あるが平成16・17年では30%である（図1）
一方、6.5を越える高pH園地について平成16・17年では39%あり、これらの園地は土壌診断に基づき、施用石灰量を調整する。また、土壌pHと土壌中交換性石灰には相関が認められる（図2）。
2. 可給態リン酸について、昭和59年には46%の園地が適正值で不足園地が33%ある。
しかし、平成16・17年では50mg/100gを超える過剰園地が67%ある（図3）。これらの園地では数年分の施肥に相当するリン酸が蓄積している。

[技術の活用面・留意点]

1. 石灰施用時にウメにとって重要であるホウ素の吸収が抑制されるおそれがあるので、同時にホウ素資材を施用する。
2. 園地や移植後の土壌管理により土壌環境が異なるため、肥料や土壌改良資材を施用するときは土壌診断（土壌分析値）を参考にする。

[具体的データ]

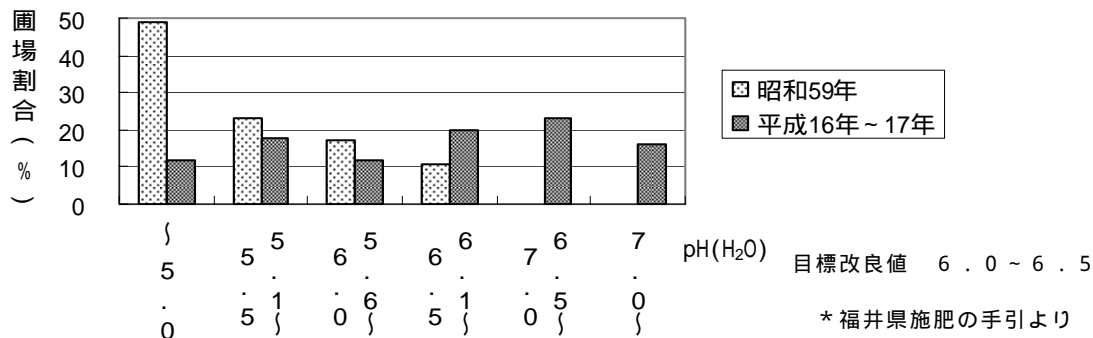


図 1 土壌 pH(H₂O) の圃場割合

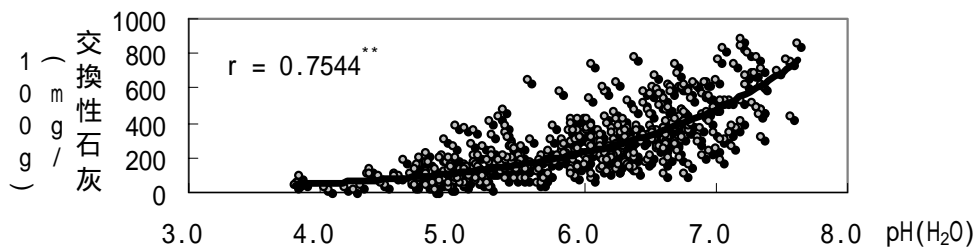


図 2 土壌 pH(H₂O) と交換性石灰との関係

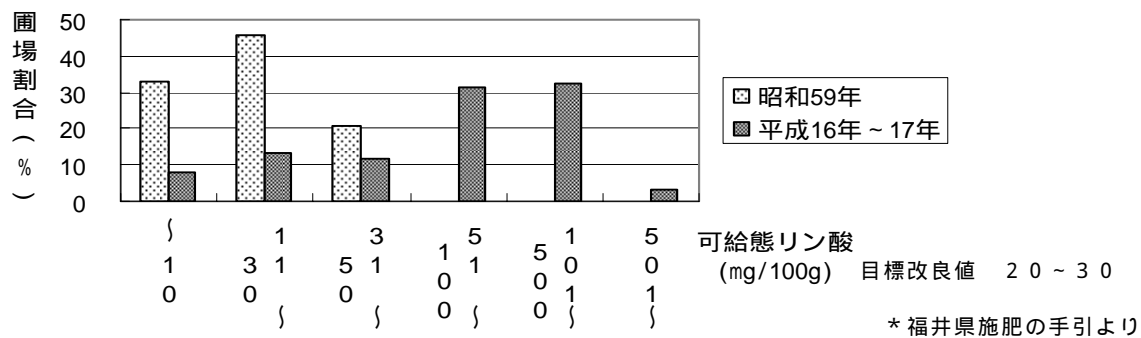


図 3 可給態リン酸の圃場割合

[その他]

研究課題名：ウメの果実特性に応じた生理障害果発生軽減技術の開発

研究期間：2004 ~ 2005 年度

研究担当者：福島朋行